

2025年2月28日

中央大学アカデミック・サポートセンター ライティング・ラボ 2024年度後期活動報告書

抄録

今学期中のセッション数は、787件（前年同期 772件）、稼働率は70.36%（前年同期 73.1%）であった（I-3）。今学期はセッション設置数を前年同期より増加できたため、セッション数は前年同期ほぼ同様であったものの、セッション稼働率が前年同期と比較し下がる結果となった。ただし、70%を超える稼働率は、セッションの質の担保という点では問題がある。チューター研修を充実させ、セッションの質を保つには60%代後半での推移が望ましい。また、特に繁忙期にセッションが連続することで、チューターの余裕がなくなり、学生と十分にコミュニケーションがとれないこともあった。今後も、セッション設置数増加に向け、チューター公募を行いたい。

セッション形式の内訳は、学期中に実施した総セッション数のうち、対面は442件（前年同期 359件）、オンラインは345件（前年同期 413件）であった。オンラインセッション数の減少は、法学部の利用学生が減少したためである。多摩キャンパス以外への広報に依然として課題が残る結果となった。

留学生に向けたセッションであるが、全体数としては前年同期とほぼ変わりがない結果となった。しかし、修士論文執筆のために10回以上利用した7名へのセッション数が大学院留学生への全セッションのうち約7割を占めている。また、今期は生成系AIを使用して母国語から日本語に翻訳した文章を検討したいという相談が増えた。このように、大学院留学生においては少数の利用にとどまったこと、生成系AIに関する相談が増加したことが今学期の特徴であった。

広報に関する課題としては、アカデミック・ライティングに関する観点を検討する場というラボの機能を学生に正確に周知するということがあげられる。アカデミック・ライティングの観点と専門内容は異なること、ライティング・ラボは専門内容を検討する場ではないことを学生に伝える工夫をしていきたい。また、見学ツアー／出張ガイダンスの開催時期や内容についても、より教員の要望に沿った形式や内容にし、学生へのライティング・ラボの周知につなげるに工夫が必要である。

以 上

はじめに

2024 年度後期におけるライティング・ラボの活動状況について、以下の通り報告する。
Ⅰでは開室状況と利用実績、Ⅱではセッション以外の活動、Ⅲでは来期において特筆すべき所見を述べる。

Ⅰ 開室状況と利用実績

Ⅰ-1 開室期間と日数、チューター配置数

開室期間：2024 年 9 月 20 日から 2025 年 1 月 21 日までの月～金曜日

開室時間：14:10～17:40 ※月・木曜日のみ 10:50～17:40

開室日数：74 日（前年同期 75 日）

設置セッション数¹：1137 コマ（前年同期 1067 コマ）

アカデミック・ライティング部門長：尹智鉉

スーパーバイザー（SV）：中野玲子

アソシエイト・スーパーバイザー（ASV）：林雅子

アシスタント・スーパーバイザー（ASV）：松井雄志

シニアチューター（ST）：5 名

チューター：8 名

Ⅰ-2 受付方針（2024 年度後期）

受付優先順位および予約の可否は、文章の種類（対象文章かそれ以外か）に基づく。

1. 対象文章

授業で課題となったレポート、発表レジュメ、卒業論文、修士論文、博士論文、投稿論文、プレゼンテーション原稿（スライド、口頭用）、研究計画書、ボランティアセンター報告書、総合政策学部プロジェクト活動報告書

2. 空きがある場合につき、受け付ける文章

奨学金応募書類に含まれる志望動機書、留学志望書、公務員試験練習課題
日本語翻訳（授業の課題のみ）
そのほか、アカデミック・ライティングの観点でコメントできそうな文章

3. 受付不可とする文章

就職活動関係の文章（キャリアセンターへ案内）、メールや手紙の文章
英語の文章²、公務員試験以外の筆記試験対策のための相談

Ⅰ-3 実施セッション数と稼働率

実施セッション数：787 件（前年同期 772 件）

¹ 稼働可能なブース数すなわちチューターの配置数をコマとしてカウントした。SV/ASV に関しては、セッション空き時間はその他業務を行うため、設置数に含めない。

² 英語論文を書く前段階の日本語による構想などに関する相談は受け付けている。

(うち対面 442 件、オンライン 345 件)
セッション稼働率：70.36% (前年同期 73.1%)³

図 1 に、2013 年のライティング・ラボ開設時からのセッション稼働率推移を、表 1 に利用数他の推移を示す。

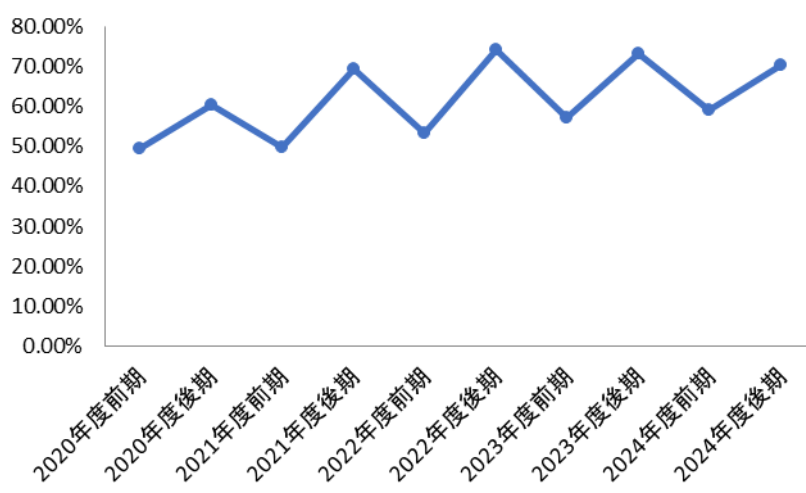


図 1 ライティング・ラボ学期別稼働率の推移

表 1 利用数、設置セッション数、セッション稼働率、利用数前年同期比の推移

年度・期	利用数	開室日数	設置セッション数	セッション稼働率	利用数前年同期比
2020年度前期	129	36	261	49.40%	22.87%
2020年度後期	355	56	588	60.40%	62.83%
2021年度前期	425	70	852	49.88%	329.46%
2021年度後期	635	72	916	69.32%	178.87%
2022年度前期	408	73	771	53.44%	96%
2022年度後期	698	75	954	74.11%	109.92%
2023年度前期	441	75	783	57.09%	108.09%
2023年度後期	772	75	1067	73.10%	110.60%
2024年度前期	554	75	950	59.16%	125.62%
2024年度後期	787	74	1137	70.36%	101.94%

24 年度後期のセッションの稼働実態として、以下に、週毎の設置数・稼働数の推移 (図 2)、週毎の稼働率の推移 (図 3) 週別・曜日別のセッション数と稼働率の表 (表 2、表 3) を示す。

³ SV/ASV に関しては、セッション空き時間はその他業務を行うため、設置数に含めない。また、No Show (予約はしたものの来室せず) については、実施扱いで稼働率を算出した。実際のセッションは 787 回であるが、稼働率の計算に関しては、セッション数は 800 回としている。

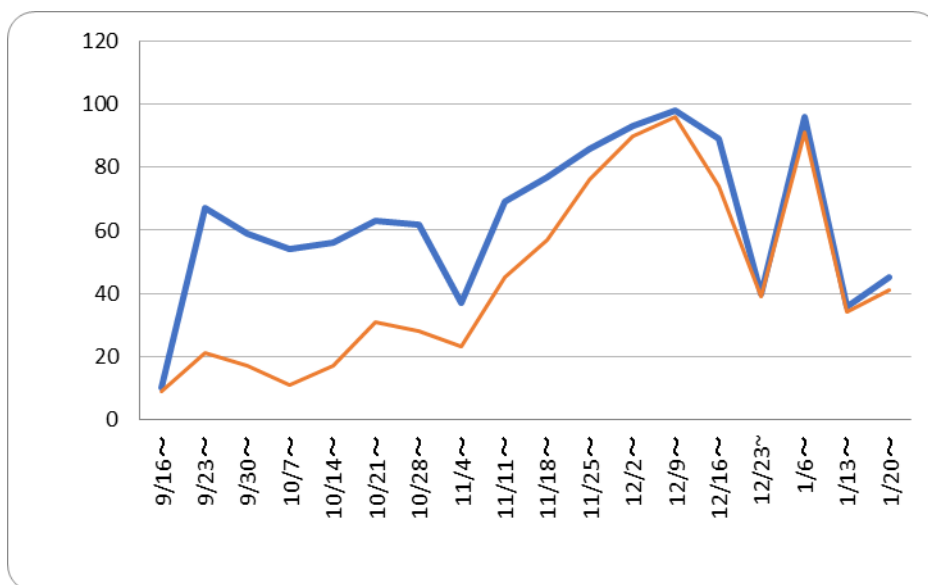


図2 2024年度後期週別セッション設置数・稼働数の推移
 (青色：設置数、茶：稼働数)

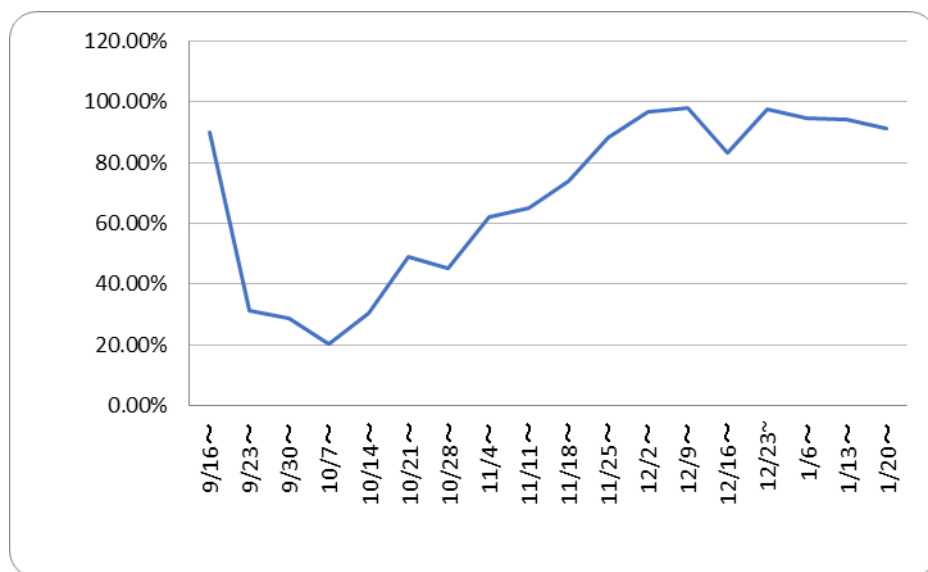


図3 2024年度後期週別セッション稼働率の推移

曜日毎の稼働率に大きな偏りは見られない。なお、月曜日と木曜日の稼働数が多いのは設置数が多いからである。

表2 週別・曜日別セッション数・稼働率（9月第3週～11月第4週）

		9/16～	9/23～	9/30～	10/7～	10/14～	10/21～	10/28～	11/4～	11/11～	11/18～
月	設置数		20	20	20	16	15	19		17	21
	稼働数		1	6	2	1	4	10		12	16
	稼働率		5.00%	30.00%	10.00%	6.25%	26.67%	52.63%		70.59%	76.19%
火	設置数		6	4	4	6	8	10		7	8
	稼働数		5	2	1	4	7	8		5	8
	稼働率		83.33%	50.00%	25.00%	66.67%	87.50%	80.00%		71.43%	100.00%
水	設置数		16	16	16	15	16	18	16	18	21
	稼働数		3	4	1	3	8	4	11	9	9
	稼働率		18.75%	25.00%	6.25%	20.00%	50.00%	22.22%	68.75%	50.00%	42.86%
木	設置数		17	12	7	12	16	15	14	16	16
	稼働数		8	2	4	4	6	6	7	8	13
	稼働率		47.06%	16.67%	57.14%	33.33%	37.50%	40.00%	50.00%	50.00%	81.25%
金	設置数	10	8	7	7	7	8		7	11	11
	稼働数	9	4	3	3	5	6		5	11	11
	稼働率	90.00%	50.00%	42.86%	42.86%	71.43%	75.00%		71.43%	100.00%	100.00%
計	設置数	10	67	59	54	56	63	62	37	69	77
	稼働数	9	21	17	11	17	31	28	23	45	57
	稼働率	90.00%	31.34%	28.81%	20.37%	30.36%	49.21%	45.16%	62.16%	65.22%	74.03%

表3 週別・曜日別セッション数・稼働率（11月第5週～1月第4週）

		11/25～	12/2～	12/9～	12/16～	12/23～	1/6～	1/13～	1/20～	前期全体
月	設置数	24	31	27	26	28	32		34	350
	稼働数	19	31	27	21	27	31		30	238
	稼働率	79.17%	100.00%	100.00%	80.77%	96.43%	96.88%		88.24%	68.00%
火	設置数	11	11	11	12	12	11		11	132
	稼働数	11	11	11	12	12	11		11	119
	稼働率	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%		100.00%	90.15%
水	設置数	19	20	20	18		20	15		264
	稼働数	15	18	20	11		20	12		148
	稼働率	78.95%	90.00%	100.00%	61.11%		100.00%	80.00%		56.06%
木	設置数	21	22	30	23		23	21		265
	稼働数	21	21	28	20		19	22		189
	稼働率	100.00%	95.45%	93.33%	86.96%		82.61%	104.76%		71.32%
金	設置数	11	9	10	10		10			126
	稼働数	10	9	10	10		10			106
	稼働率	90.91%	100.00%	100.00%	100.00%		100.00%			84.13%
計	設置数	86	93	98	89	40	96	36	45	1137
	稼働数	76	90	96	74	39	91	34	41	800
	稼働率	88.37%	96.77%	97.96%	83.15%	97.50%	94.79%	94.44%	91.11%	70.36%

【所見】

今期はセッション設置数を前年同期より70コマ増加できた。そのため、セッション数が前年同期より20件増加したものの、セッション稼働率は前年同期より2.74%下がる結果となった。ただし、70%を超える稼働率は、セッションの質を維持・向上するという点で問題がある。研修を充実させ、セッションの質を保つには60%代後半での推移が望ましい。そのためにも、チューター数を増やしていくことが望ましい。今後も、チューターの公募と育成に努めていきたい。

11月に入るまで稼働率が50%未満であった。前年同期は10月9日以降常に50%以上稼働していたが、今学期は期末時期までの利用数に関して課題が残った。期末時期まで稼働率が上がらないことは、卒業論文や修士論文のセッションを継続的に行えていない状況を示す。執筆段階に合わせた支援をするためにも、ラボでできる支援、またラボを利用する意義を学生に周知していく必要がある。

I-4 利用学生の内訳

*利用学生数（延べ）⁴ 合計 787 件（前年同期 772 件）

*初来室数 226 名（前年同期 206 名）。そのうち留学生の初来室は 20 名（前年同期 18 名）

*利用学生の所属と学年を示した表（表 4、表 5、表 6、表 7）以下に示す。なお、表の（）内は前年度同期の人数を示している。

表 4 利用した学部生の所属と学年

学部全体(所属/学年)	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年～	計
法学部	20(40)	3(39)	3(12)	10(21)	13(9)	49(121)
経済学部	13(4)	5(15)	6(16)	15(16)	0(0)	39(51)
商学部	5(13)	3(12)	2(4)	38(32)	0(0)	48(61)
理工学部	0(0)	0(0)	0(0)	0(1)	0(0)	0(1)
文学部	76(21)	8(9)	28(6)	247(196)	7(21)	366(253)
総合政策学部	17(12)	9(0)	7(9)	17(21)	2(4)	52(46)
国際経営学部	0(3)	0(0)	2(0)	10(19)	1(2)	13(24)
国際情報学部	5(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	5(0)
法学部通信教育課程						2(6)
聴講生						0(0)
科目等履修生						0(2)
計	136(93)	28(75)	48(47)	337(305)	23(36)	574(565)

表 5 利用した学部留学生の所属と学年

学部留学生(所属/学年)	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年～	計
法学部	0(4)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(4)
経済学部	4(0)	0(0)	0(2)	4(6)	0(0)	8(8)
商学部	0(0)	0(0)	0(0)	9(1)	0(0)	9(1)
理工学部	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
文学部	1(0)	3(0)	0(0)	6(0)	0(2)	10(2)
総合政策学部	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
国際経営学部	0(0)	0(0)	1(0)	3(0)	1(0)	5(0)
国際情報学部	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
法学部通信教育課程						0(0)
聴講生						0(0)
科目等履修生						0(0)
計	5(4)	3(0)	1(2)	22(7)	1(2)	32(15)

⁴ 延べ利用数。実施セッション数に基づくため、たとえば同一学生の同一日利用および2連続セッションは、2セッションとしてカウントしている。

表 6 利用した大学院生の所属と課程

大学院全体(所属/課程)	前期	後期	計
法学研究科	46(48)	1(2)	47(50)
経済学研究科	20(48)	7(0)	27(48)
商学研究科	23(28)	0(0)	23(28)
理工学研究科	0(0)	0(0)	0(0)
文学研究科	79(51)	6(8)	85(59)
総合政策/公共政策研究科	31(22)	0(0)	31(22)
ビジネススクール	0(0)	0(0)	0(0)
計	199(197)	14(10)	213(207)

表 7 利用した大学院留学生の所属と課程

大学院留学生(所属/課程)	前期	後期	計
法学研究科	43(43)	1(2)	44(45)
経済学研究科	20(46)	0(0)	20(46)
商学研究科	21(26)	0(0)	21(26)
理工学研究科	0(0)	0(0)	0(0)
文学研究科	70(48)	6(8)	76(56)
総合政策/公共政策研究科	30(13)	0(0)	30(13)
ビジネススクール	0(0)	0(0)	0(0)
計	184(176)	7(10)	191(186)

最後に、セッションで検討した文章の種類を表 8 に示す。後期には、例年通り卒業論文、修士論文という長い文章についての相談が多かった。

表 8 相談文章の種類

相談文章の種類	全体(前年同期)	留学生(前年同期)
授業のレポート	225(231)	28(39)
授業の発表資料	11(20)	7(8)
研究計画書	37(24)	16(4)
卒業論文	313(295)	10(8)
修士論文	154(143)	143(127)
博士論文	3(2)	3(2)
投稿論文・研究ノート	10(22)	6(8)
学外での発表資料	4(5)	1(4)
その他	30(30)	9(1)
計	787(772)	223(201)

【所見】

利用学生の所属に関して前年同期から変化があった。一つ目は法学部学部生の利用数が減少したことである。全ての学年で利用が減少している。多摩キャンパス以外への広報の課題が残る結果となった。二つ目は文学部の学部生の利用が増加したことある。なかでも、1年生と4年生による利用の増加が顕著である。授業レポートや卒業論文の執筆時、教員がライティング・ラボの利用を推奨することがきっかけで入室する学生が一定数見られる。ライティング・ラボの活動への教員の理解や協力を得るためにも、引き続

き教員への広報を行っていききたい。

また、留学生の利用数については前年同期と大きな違いは見られなかった。ただし、留学生7名へのセッションが大学院留学生への全セッション数のうち約7割を占めるなど、利用学生に偏りが目立つ。また、留学生の相談では、生成系 AI を利用して母国語から日本語に翻訳した文章を検討したいというこれまでにないものがあつた。

I-5 夏期開室

今年度も夏季休業期間に開室を行った。セッションはSV、ASVI名、及びチューター2名の合計4名で行った。なお、SV/ASVに関しては、セッション空き時間はその他業務を行うため、設置数に含めない。

- ・開室日程 7/30、8/1、8/20、8/22、8/27、8/29、9/3、9/5、9/10、9/12 (計10日間)
- ・開室時間：13:20～17:40
- ・設置セッション数：131コマ
- ・初来室数 30名 (留学生1名)
- ・実施セッション数：93件 (うち対面27件、オンライン66件)
- ・セッション稼働率：70.99%

セッション数と稼働率を表9に示す。また、利用学生の所属と学年を示した表(表10、表11、表12、表13)を以下に示す。

表9 セッション数・稼働率

		07/30～	8/20～	8/27～	9/3～	9/10～	前期全体
火	設置数	16	14	15	10	10	65
	稼働数	15	9	12	6	4	46
	稼働率	93.75%	64.29%	80.00%	60.00%	40.00%	70.77%
木	設置数	20	12	13	11	10	66
	稼働数	18	9	10	7	3	47
	稼働率	90.00%	75.00%	76.92%	63.64%	30.00%	71.21%
計	設置数	36	26	28	21	20	131
	稼働数	33	18	22	13	7	93
	稼働率	91.67%	69.23%	78.57%	61.90%	35.00%	70.99%

表10 利用した学部生の所属と課程

学部全体(所属/学年)	1年	2年	3年	4年	5年～	計
法学部	8	2	0	4	2	16
経済学部	1	0	0	0	0	1
商学部	0	1	0	9	0	10
理工学部	0	1	0	0	0	1
文学部	14	0	8	23	0	45
総合政策学部	0	1	0	0	0	1
国際経営学部	0	0	0	5	0	5
国際情報学部	0	0	0	0	0	0
法学部通信教育課程						0

聴講生	0					
科目等履修生	0					
計	23	5	8	41	2	79

表 11 利用した学部留学生の所属と課程

学部全体(所属/学年)	1年	2年	3年	4年	5年～	計
法学部	1	0	0	0	0	1
経済学部	0	0	0	0	0	0
商学部	0	0	0	0	0	0
理工学部	0	0	0	0	0	0
文学部	0	0	0	0	0	0
総合政策学部	0	0	0	0	0	0
国際経営学部	0	0	0	0	0	0
国際情報学部	0	0	0	0	0	0
法学部通信教育課程	0					
聴講生	0					
科目等履修生	0					
計	1	0	0	0	0	1

表 12 利用した大学院生の所属と課程

大学院全体(所属/課程)	前期	後期	計
法学研究科	2	0	2
経済学研究科	0	0	0
商学研究科	3	0	3
理工学研究科	0	0	0
文学研究科	1	8	9
総合政策/公共政策研究科	0	0	0
ビジネススクール	0	0	0
計	6	8	14

表 13 利用した大学院留学生の所属と課程

大学院全体(所属/課程)	前期	後期	計
法学研究科	2	0	2
経済学研究科	0	0	0
商学研究科	3	0	3
理工学研究科	0	0	0
文学研究科	1	8	9
総合政策/公共政策研究科	0	0	0
ビジネススクール	0	0	0
計	6	8	14

・相談文章の種類 () 内は留学生の人数

授業のレポート	36件 (3件)
研究計画書	15件 (0件)
卒業論文	23件 (0件)
博士論文	8件 (8件)
投稿論文・研究ノート	3件 (3件)
学会での発表資料	4件 (0件)
その他	4件 (1件)

・ライティング・ラボを知ったきっかけ () 内は留学生の人数

ラボのHP/SNS	2件 (0件)
授業で知った/先生にすすめられた	24件 (1件)
友人/先輩/後輩にすすめられた	2件 (0件)
レポートの書き方資料で知った	2件 (0件)
学内のポスターやパンフレットで知った	3件 (0件)

【所見】

夏季休業期間の開室では、7月末の利用が特に多かった。授業レポート等の締め切り間近の駆け込み需要が多かったことが理由としてあげられる。また、8月や9月には卒業論文や研究計画書を中心に利用する学生が多かった。

夏季休業期間にもラボのニーズがあることを改めて把握することができた。

I-6 冬期開室

冬季休業期間に行った開室について以下に記す。セッションはSV、ASV 1名、チューター1名の合計3名で行った。セッションは全てオンラインで行った。

セッション設置数が少ないため、ここでは稼働率ではなく、稼働数や利用者の内訳を報告する。

- ・開室日程 12/25、12/26 (計2日間)
- ・開室時間 13:20~16:40
- ・利用学生数 (延べ) 合計 27名 (留学生 14名)
- ・初来室数 3名 (留学生 0名)

利用学生の所属と学年を示した表(表14、表15)を以下に示す。なお、学部留学生の利用はなく、大学院生の利用は留学生のみであった。

表14 利用した学部生の所属と課程

学部全体(所属/学年)	1年	2年	3年	4年	5年~	計
法学部	2	0	0	0	0	2
経済学部	0	0	2	0	0	2
商学部	0	0	0	0	0	0

理工学部	0	0	0	0	0	0
文学部	1	0	0	0	0	1
総合政策学部	1	2	2	1	0	6
国際経営学部	0	0	0	0	0	0
国際情報学部	0	0	0	0	0	0
法学部通信教育課程						2
聴講生						0
科目等履修生						0
計	4	2	4	1	0	13

表 15 利用した大学院留学生の所属と課程

大学院全体(所属/課程)	前期	後期	計
法学研究科	0	0	0
経済学研究科	2	0	2
商学研究科	3	0	3
理工学研究科	0	0	0
文学研究科	3	0	3
総合政策／公共政策研究科	6	0	6
ビジネススクール	0	0	0
計	14	0	14

・相談文章の種類 () 内は留学生の人数
 授業のレポート 8件 (0件)
 卒業論文 3件 (0件)
 修士論文 14件 (14件)
 その他 2件 (0件)

・ライティング・ラボを知ったきっかけ () 内は留学生の人数
 授業で知った／先生にすすめられた 3件 (0件)

【所見】

冬季休業期間の開室では、相談文章の多くが授業のレポートと修士論文であった。この期間は、修士論文提出の直前となり、ライティング・ラボ利用のニーズが高いため、開室期間を来年度も検討したい。

I-7 利用学生のアンケート

各セッション終了後、利用学生に任意でアンケートに協力してもらった。対面では紙面にて、オンラインはGoogleフォームにて実施した。今期は対面では335通、オンラインでは47通を回収した。質問項目と結果を以下に示していく。

ライティング・ラボを知ったきっかけ

回答の重複を避けるため、ライティング・ラボを知ったきっかけについては、予約フォームにて初回利用の学生に限定してたずねた。回答件数と割合を表 16 にまとめた。

表 16 ライティング・ラボを知ったきっかけ（複数回答可）

きっかけ	全体の件数 (%)	うち留学生の件数 (%)
ラボの HP/SNS	13 (4.8)	3 (11.1)
授業で知った／先生にすすめられた	160 (58.8)	16 (59.3)
友人／先輩／後輩にすすめられた	34 (12.5)	3 (11.1)
レポートの書き方資料で知った	21 (7.7)	1 (3.7)
学内のポスターやパンフレットで知った	36 (13.2)	3 (11.1)
ラボのイベント（講座など）で知った	1 (0.4)	0 (0.0)
入学時のガイダンス／資料で知った	5 (1.8)	0 (0.0)
その他	2 (0.7)	1 (3.7)
計	272 (100.0)	27 (100.0)

【所見】

きっかけはこれまでと同様、教員の推奨によるものが多かった。今後も教員への宣伝を継続し、学生への周知につなげたい。次いで学内のポスターやパンフレット、ラボのホームページや SNS で知った学生が多かった。ポスターは紙での掲示だけでなく、茗荷谷キャンパスのサイネージなども用いてなるべく多くの学生の目に触れるようにした効果が出たのだと推測される。また、友人など知り合いにすすめられたという回答も多かった。初めて行く場所へのハードルが、知人にすすめられたことで下がったのではないかと。

ただし、後述のようにチューターから専門的なアドバイスがほしいという意見が学生から見られ、どのような場面でラボを利用すべきかまでは学生にうまく浸透できていない可能性がある。アカデミック・ライティングの観点で検討していく場所であるということも含めてラボが周知されるよう、広報活動に力を入れていきたい。

セッションは有益だったか⁵

ここからはセッション後のアンケートの回答をまとめていく。比較として、表には 2024 年度前期の回答も併記した。まず、セッションが有益だったかどうかに対する回答人数と割合を、セッション形式別に表 17 にまとめた。

⁵ 「有益ではなかった」「あまり有益ではなかった」「どちらともいえない」「有益だった」「とても有益だった」の 5 段階評価。

表 17 セッションは有益であったか

回答項目	後期の回答人数 (%)		前期の回答人数 (%)	
	対面	オンライン	対面	オンライン
有益ではなかった	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
あまり有益ではなかった	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
どちらともいえない	4 (1.2)	0 (0.0)	3 (1.4)	0 (0.0)
有益だった	41 (12.3)	9 (19.1)	26 (11.9)	4 (11.1)
とても有益だった	289 (86.5)	38 (80.9)	189 (86.7)	32 (88.9)
計	334 (100.0)	47 (100.0)	218 (100.0)	36 (100.0)

※後期対面セッション1件回答なし

セッションが有益だと感じた理由

セッションが有益だと感じた理由を、自由記述（任意）でたずねた。後期は卒業論文など長い文章を作成するため、自分の考えをどのようにまとめていけばいいのかわからないといった相談が多かった。そのため理由でも、チューターとのやり取りを通して自分の考えを整理し、テーマの明確化や文章の問題点に気づくことができたといった回答が多かった。

「セッションは有益であったか」の問いに対して、前期同様ほとんどの学生が対面・オンラインセッションともに「有益であった」「とても有益であった」と回答していた。とくにオンラインセッションは前期に引き続き「どちらともいえない」「あまり有益ではなかった」「有益ではなかった」に回答している学生はいなかった。オンラインセッションではカメラをオフにした状態でセッションを行っており、対面のようにボディランゲージが伝わらない。その分、学生に対する言葉かけがチューターがかなり慎重に行っていた効果が表れたのではないだろうか。

一方、対面セッションでは「どちらともいえない」という回答が4件見られた。そう答えた理由として「揚げ足取りのように指摘され、気分が悪かった。（自分の文章力がないとはいえ）」「書き方は分かったが、自分の意思を伝えられなかった」「初見でその場で意見を言うだけで方式だったので、認識の擦り合わせに時間がかかり、本質についてあまり話せず残念でした」と述べられていた。1つ目のコメントはチューターからの指摘を学生がネガティブに受け取っていた、2つ目と3つ目のコメントはセッション内で学生が話したいことまで到達できなかったというものである。これらの回答がされた時期は繁忙期にあたる12月であった。セッション時間が限られており、提出期限も迫っているため学生とチューターともに時間的、心理的な余裕がなくなっていたのではないか。例えば、提出までのスケジュールを確認し、今のペースなら十分に書き上げられると伝えて学生に安心感を持たせたり、修正箇所を都度指摘するのではなく修正の方法を伝えて学生がセッション後に自分で文章の修正ができるようにしたりするなど、学生が気持ちに余裕をもっ

セッションや課題に臨めるような工夫が必要である。また、対面セッションであることを生かし、ボディランゲージなども活用して学生が自分の考えを話しやすい雰囲気づくりをしていくことも重要である。1回のセッション内で学生の要望があった点まで到達できなかった場合も、フィードバックシートを用いて次回のセッションで検討できる旨を伝えと良いだろう。

なお、表17にて回答がなかった学生だが、理由として「自分では気付かない細かい文章上や内容の違和感、論文の形式について知ることができたから」と述べていたため、単なる回答ミスで、セッションについては好意的に捉えていたことが推測される。

セッションが有益であった理由について、「自分の文章の問題点の気づきと疑問点の解消」や「内容や思考の整理と明確化」で示されていたように、チューターからの質問に答えていく中で自分の文章のわかりにくい点に気づき、内容を整理することができたといった回答がよく挙げられていた。また、チューターが親身になって相談に乗ったことで文章を書くことの不安が解消できたといった回答も述べられており、学生の不安を解消し、自立した書き手になっていけるようなセッションがされていることがわかる。今後も学生がすすんでレポートや論文を書くための支援ができるよう、チューター研修を重ねていきたい。

セッションの時間⁶

セッションの時間についてどう感じたかについての回答人数と割合を表18に示した。

表18 セッションの時間についてどう感じたか

回答項目	後期の回答人数 (%)		前期の回答人数 (%)	
	対面	オンライン	対面	オンライン
短かった	11 (3.3)	4 (8.5)	13 (6.0)	3 (8.3)
少し短かった	69 (20.6)	14 (29.8)	15 (6.9)	9 (25.0)
妥当だった、ちょうどよかった	252 (75.2)	29 (61.7)	190 (87.2)	24 (66.7)
少し長かった	2 (0.6)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
長かった	1 (0.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
計	335 (100.0)	47 (100.0)	218 (100.0)	36 (100.0)

【所見】

対面・オンラインセッションともに前期同様、大半の学生はセッション時間が妥当だったと回答した。しかし、対面・オンラインセッションで「少し短かった」と回答している学生の割合は前期に比べ増えており、対面では10%以上回答が上昇していた。先述したように後期は卒業論文や修士論文など長い文章を検討することが多かった。一度のセッションですべて検討できるわけではないため、物足りなく感じたの

⁶ 「短かった」「少し短かった」「妥当だった、ちょうどよかった」「少し長かった」「長かった」の5段階評価。

だろう。締め切りに余裕がある場合はラボの継続的な利用を勧め、それぞれの回でどこを直していくのかあらかじめスケジュールを立てる、セッション後はフィードバックシートで今回のセッションでどこを検討したか明確にするなど、学生が限られた時間で充足感を得られる工夫をしていくことが求められる。

対面セッションの良かった点と困った点

セッションの良かった点/困った点について、セッション形式別にたずね、表にまとめた。まず、表 19 に対面セッションの良かった点、表 20 に対面セッションで困った点の回答件数と割合を示した。

表 19 対面セッションの良かった点（複数回答可）

回答項目	後期の回答件数 (%)	前期の回答件数 (%)
場所がわかりやすかった	107 (15.2)	84 (17.8)
セッションブースなどの環境が整っていた	142 (20.1)	103 (21.8)
文章の共有が楽だった	178 (25.2)	111 (23.5)
チューターとの意思疎通がしやすかった	268 (38.0)	168 (35.5)
その他	8 (1.1)	3 (0.6)
回答なし	2 (0.3)	4 (0.8)
計	705 (100.0)	473 (100.0)

表 20 対面セッションで困った点（複数回答可）

回答項目	後期の回答件数 (%)	前期の回答件数 (%)
場所がわかりにくかった	32 (9.5)	21 (9.6)
セッションブースなどの環境整備に問題がある	1 (0.3)	1 (0.5)
文章共有の準備に手間取った	9 (2.7)	12 (5.5)
チューターとの意思疎通が難しかった	5 (1.5)	11 (5.0)
その他	0 (0.0)	3 (1.4)
回答なし	291 (86.1)	170 (78.0)
計	338 (100.0)	218 (100.0)

オンラインセッションの良かった点と困った点

次にオンラインセッションについて、表 21 にオンラインセッションの良かった点、表 22 にオンラインセッションで困った点の回答件数と割合を示した。

表 21 オンラインセッションの良かった点（複数回答可）

回答項目	後期の回答件数 (%)	前期の回答件数 (%)
移動の手間が省けた	38 (42.7)	31 (53.4)
文章やデータの事前共有が 楽だった	29 (32.6)	15 (25.9)
対面とは異なり緊張せずに 済んだ	18 (20.2)	10 (17.2)
特になし	4 (4.5)	1 (1.7)
その他	0 (0.0)	1 (1.7)
計	89 (100.0)	58 (100.0)

表 22 オンラインセッションで困った点（複数回答可）

回答項目	後期の回答件数 (%)	前期の回答件数 (%)
場所の確保が難しかった	3 (5.9)	0 (0.0)
文章やデータの事前共有が大変 だった	3 (5.9)	0 (0.0)
どのように操作すればよいのか わからず不安だった	4 (7.8)	4 (10.0)
チューターの声が聞き取りづら いときがあった	1 (2.0)	4 (10.0)
特になし	39 (76.5)	32 (80.0)
その他	1 (2.0)	0 (0.0)
計	51 (100.0)	40 (100.0)

【所見】

対面セッションについて、良かった点として前期に引き続き「チューターとの意思疎通がしやすかった」が最も多く回答されていた。その他の回答でも、「表情や手ぶりを見ながら行えた」「対面のほうが、表現できないこと、または相談しなくてもいいと思っている部分も気軽にきけると思います」といったチューターとの会話のしやすさが挙げられていた。また、困った点にて、「チューターとの意思疎通が難しかった」という回答の割合が前期よりも下がっており、学生が話しやすい雰囲気づくりができていていることが考えられる。対面セッションの困った点では、前期同様に「場所がわかりにくかった」と回答している学生が一定数いた。前期のポスターでマップを示したところ「場所がわかりやすかった」と回答した学生の割合が増えたことを鑑みて、今後は後期のポスターでもマップを示すと良いのではないかと。ホームページにラボへの経路が掲載されていることも、今後もっと周知させていきたい。

オンラインセッションについて、良かった点の回答で「文章やデータの事前共有が楽だった」という回

答の割合が前期よりも増えていた。困った点で「チューターの声が聞き取りづらいときがあった」という回答の割合は反対に減っており、Webex の操作にチューターが慣れてきたこと、学生に送るメールの文言を修正したことが影響していると考えられる。ただし、困った点で「文章やデータの事前共有が大変だった」という回答の割合も前期より増えていた。後期は卒業論文など長い文章を検討しているため、補足の資料を学生が追加で示す場面もあった。また、学生がどこを検討してほしいのかチューターが探すのに時間がかかったこともあり、これらが回答の割合の上昇に影響したことが推測される。

より良いライティング・ラボにするためのアドバイス

最後に、より良いライティング・ラボにするためのアドバイスを自由記述（任意）で回答を求めた。

ラボに対する要望として、表 9 でも示されていたようにセッション時間やセッション日の増加、そしてチューターの指名が挙げられていた。セッション日の増加希望のコメントとして「オンラインだけになってもいいので 1 月 22 日から 28 日も相談に乗ってもらえる日程があると嬉しい」とあった。実際は 27 日、28 日に春期開室をしていたのだが、日程やチューターの確保に時間がかかり告知が直前であった。授業期間外の開室について、今後早めに告知ができるようにしていきたい。セッション時間の増加、チューターの指名について、先述のように後期は長い文章で継続的に利用する学生が多かったため、こうした要望がより多く出やすかったのだと考えられる。ただし、「もしできれば本専攻のチューターに担当させてほしいです。より専門的なアドバイスができるかもしれない」といったライティング・ラボで相談できる観点からややずれているコメントも見られた。ラボは専門的なアドバイスをする場所ではなく、アカデミック・ライティングの観点から検討していく場所であることを、より周知していくことが求められる。

ラボの利用に関する要望について、「事前にアンケートで何を聞きたいか回答していたが、当日具体的に何ページかを問われることがあったので、『何ページのどこを見てほしいか目星をつけておくように』アナウンスしていただけるとスムーズに答えられると思いました」というコメントに注目したい。長い文章を検討する場合は範囲を区切ってセッションを行うことが多い。事前に検討希望箇所に目星をつけてあると、円滑にセッションを行い、限られたセッション時間でも充足感を高めていくことにつながるのではないかと。今後チューター研修で検討していきたい。

後期では、卒業論文など長い文章を継続的に検討しに来室する学生が多かった。対面・オンラインセッションともにセッションで困った点で 8 割程度の学生が回答なし、または特になしを選択していた。最後のラボへのアドバイスでも感謝の表明を述べる回答が多数を占めており、多くの学生が現在のセッションに満足感を持っていることがわかる。上述の要望を踏まえさらにラボの環境を改善していき、より多くの学生がラボの理念に沿った学びを得られるようにしていきたい。

II セッション以外の活動

II-1 広報活動

II-1-1 出張ガイダンス及び見学ツアーの実施

今期は、出張ガイダンス 3 件、見学ツアー 7 件、合計 10 件実施した。特に、見学ツアー後にセッションを利用する学生が多く見られ、施設を見ることがライティング・ラボの利用に繋がるということが明らかである。

また、今学期初の試みとして、12月5日のオンライン出張ガイダンス時、ミニ・ワンポイント講座を行った。講座については次項に記す。

II-1-2 ミニ・ワンポイント講座の実施

今学期初の試みとして、出張ガイダンス時に、施設利用案内に加え、ミニ・ワンポイント講座を実施した。6月に実施したワンポイント講座同様、利用案内10分、ワンポイント講座20分の、合計30分程度で実施した。

日 時： 12月5日（木）
テーマ： 一文一義の手法で書く

従来は見学ツアー時に、教員よりの依頼があれば、ライティング・ラボのブース内で「ワンポイント講座」で実施した内容のレクチャーを行っていた。今後もニーズを鑑みながら、「レポートの書き方資料」内の内容に限定して、繁忙期以外にミニ・ワンポイント講座を実施することを検討したい。

II-1-3 学振道場の開催

2017、2018年と開催したが、2019年にコロナ禍で中止となって以来、開催を見送っていた学振道場を3月27日に開催する予定である。

学振道場は、学振の申請書を見直す観点を学び、申請書を共に見直す機会にする予定である。学振道場を通して、大学院生のアカデミック・ライティングに対する意識を高め、ラボの利用促進につなげたい。また、チューターにとっては専門性の高い文章を検討する機会となり、セッションスキルの向上に繋がる。詳細は次回の報告書に記す。

【所見】

「施設の存在を知る」ことが利用への第一歩であるため、出張ガイダンスや見学ツアーの機会を周知していきたい。また、利用促進に向けて、ガイダンス／ツアーの実施時期を教員の希望にあわせてできる範囲で柔軟に対応する、ミニ・ワンポイント講座を実施するなど、工夫をしていきたい。

II-2 研修

II-2-1 学期中チューター全体研修

昼休み時間を利用し、合計5回の全体研修をオンラインにて実施した。曜日毎に各1回の研修を担当し、シニアチューターを中心に、テーマ決め（表23）、事前課題や当日進行の検討、資料作成等を行った。

表23 2024年度後期チューター全体研修の概要

月日	担当	テーマ
10/3	火曜日チューター	新人お悩み相談室：学生とのコミュニケーションの取り方 —学生の主体性を守りながら、気づきにつなげる質問とは—
10/17	水曜日チューター	新人お悩み相談室：学生とのコミュニケーションの取り方 —チューターの質問の意図を明確に学生に伝えるには—
11/7	木曜日チューター	セッションの目標設定を考える

		—若手チューターによるセッションの振り返り—
11/14	金曜日チューター	効果的なセッションの進め方を学ぼう！ —シニアチューターが担当したセッションから学ぶ—
1/16	月曜日チューター	有意義なアイスブレイクをするには —面接の技法を振り返りながら—

【所見】

今学期も、チュータリングで求められるスキルを中心に、セッションの省察を通して学ぶ研修を実施した。着任して間もないチューターは、学生とのコミュニケーションに関する課題を自ら設定し、取り組んだ。2年目以降のチューターは、セッションの成果という点から担当したセッションの省察を行った。成果を検討するときの一つの指標として目標設定という観点を取り上げ、セッションを省察する方法を学んだ。また、後期は卒論・ゼミ論など長い文章が持ち込まれることが多く、専門性の高い文章に関するセッションが増える。シニアチューターが長い文章が持ち込まれたときのセッションを省察することで、若手チューターに自身のセッションスキルを紹介する研修とした。

今後も、チューターのセッションスキル向上につながる内容を取り上げ、研修を企画していく。

II-2-2 長期休業期間中の対面集合研修

上記以外では、夏季休業期間中の9月17日（火）に、多摩キャンパス内で対面による集合研修⁷を実施した。集合研修の目的は、対面で会う機会が不足しているチューター間のコミュニケーション促進と学び合いである。

日時：9月17日（火）午後

概要：文章診断練習及び模擬セッション

本研修の狙いは、後期の卒論執筆時期を見据えて、長い文章を検討するセッションスキル、およびブレインストーミングを行うセッションスキルの向上である。前者に関しては、後期の繁忙期を想定し、1万字超の文章を短時間で文章診断を行う練習を実施し、模擬セッションを行った。問題が多く含まれる文章を研修の対象として選択することで、検討する観点の取捨選択、学生主体の支援の仕方などを学んだ。また、後者に関してであるが、ブレインストーミングのために来室する学生は、レポート・論文の執筆過程の出だしてつまづいている学生が多い。そのため、学生がレポート執筆を進めるには何をセッション目標とすればいいのかを、学生の状態から判断し設定する練習とした。

模擬セッションを通して、学生の状態を判断したうえでの目標設定や、学生の状態にあわせたセッションの進め方を学んだ。なお、他チューターからセッションで使うスキルを学ぶ機会として模擬セッションは貴重であるという意見がチューターから多く出ているため、今後も対面での集合研修を有効利用し、チューター間の学び合いを促進していきたい。

II-2-3 新人チューター研修

今期着任の新人チューター2名に対し、配属曜日のチューターを中心に、文章診断練習・セッション見学・セッション計画・模擬セッション実施など約2か月にわたり実施し

⁷ 従来の長期休業期間中の集合研修では、午前が新人チューター研修、午後が全チューターの集合研修としていた。しかしながら、今学期は新人チューターの都合により、学期開始後の9月30日（月）に新人チューター研修を実施した。

た。

後期は、白門祭以降は繁忙期となるため、11月初旬には新人チューター研修を終了させたかったものの、9月10月のセッション実施数が少なく、研修が思うように進まなかった面もあった。来年度後期は、11月初旬までに模擬セッションを数多く実施するなどして、繁忙期に間に合うように研修を勧めたい。

【所見】

今期は、学期中の集合研修・長期休業中の集合研修共にセッションスキルに関する内容を多く取り上げた。セッションを実施するには、スキルだけではなく知識も必要となるため、来年は、専門分野ごとのレポートの傾向を学ぶなど知識面での研修も取り入れていきたい。

II-3 中大付属杉並高校チューター派遣業務

報告書を別添1に記載。

III 来期に向けた所見

III-1 チューター公募

後期のチューター公募を例年通り実施する。スケジュールは下記のとおりである。

2月28日（金）	応募書類受付締め切り
3月4日（火）	面接（尹先生、中野SV、松井ASV、林ASV）
4月1日（火）	着任

III-2 レポートの書き方資料改定

2021年9月に初版発行した「レポートの書き方資料」であるが、今学期に改訂作業を終了した。従来は5項目であったが、今回の改訂で2項目追加、合計7項目とし、さらに使いやすい資料としている。4月に配信・配布を開始する。

III-3 夏季・春季休業期間中の開室

夏季は7月末、春季は1月末締め切りのレポート課題が多く、2024年度は、前期後期ともに一般開室期間の最後まで予約が取りづらい状況となった。また、1月末に卒論提出となる商学部の利用学生から寄せられた1月末の開室に関する意見を踏まえ、来年度は7月中と1月中に長期休業期間中の開室日を増やすことを検討する。

以上

2025年2月28日

スーパーバイザー 中野玲子

アシスタント・スーパーバイザー 松井雄志

アソシエイト・スーパーバイザー 林雅子

【別添 1】

2024 年度中央大学アカデミック・サポートセンター ライティング・ラボ 中央大学杉並高校セッション(後期) 実施報告書

2024 年 1 月 10 日(金)

担当チューター：中尾友香、田井康平、黒田将司、池内陸

1. セッション設置数と実績

- ・ 1セッション 40 分
開室時間①15：45-16：25、②16：30-17：10、③17：15-17：55
- ・ 後期は 42 回セッションを設置（前年比増減なし）
- ・ 稼働率は前期 97%であった。

<後期の稼働率>

月別	10 月	11 月	計
セッション設置数	33	9	42
セッション実績	32	9	41
稼働率	96.9%	100%	97.6%

2. ワークショップ

- ・ 後期のテーマは前年度に引き続き「パラグラフ・ライティング」とした。
- ・ 参加チューターは黒田チューター、池内チューター、田井チューターの 3 名。
- ・ 参加者は 14 名であった。
- ・ 昨年に引き続き、ライティング・ラボの紹介、パラグラフ・ライティングのワンポイント講座、Let's Try!の流れでワークショップを行った。
- ・ 昨年との変更点であるが、昨年は、パラグラフ・ライティングのワークに加えて、中心文を繋ぐと要旨ができるという内容のワークを、ワークシートを用いて実施した。しかし今回は、ワークシートは使用せず同様の内容をスライドを用いて口頭で解説する形式をとった。
- ・ 今回は、ポスターを昨年より早期に掲示したにもかかわらず例年よりやや少ない参加者数であった。今後生徒に対してどのように周知を行うか検討する必要がある。
- ・ 終了後のアンケートは 14 名全員から回答を得られた。「本日の講座は有益だったと思いますか。」という問いに対して「強くそう思う」と回答した生徒は 8 名、「ややそう思う」は 5 名、「あまりそう思わない」は 1 名であった。そのように思った理由をフリーワードで求めたところ、12 名から回答を得た。

具体的には、パラグラフ・ライティングについて学ぶことを通して、文章を「わかりやすく」するためには、「関係のない文章」や「余計な話題」を取り除いたうえで、中心文に合わせて支持文を整理するという基本を理解してもらえた事が確認できた。また、全体の感想としては、「文が実際に分かりやすくなっていた」、「文章を書くコツについて学

ぶことができた」、「他者からの理解が得られやすい文章を書く方法が知れてよかった」、「ライティング・ラボを利用してみたいと思った」といった回答が得られた。

その一方で、「論文の構成や分析の仕方」を期待してワークショップの参加したものの、今回の内容は少し想像とは違ったという趣旨の回答もあった。この点については今後ポスター等で、予めどのような内容のワークショップを行うのか、より分かりやすく工夫して提示していく必要がある。

・また、「今後ライティング・ラボを利用したいと思いますか」という回答に関しては、「強くそう思う」5名、「ややそう思う」8名、「あまりそう思わない」1名と比較的高評価であった。今期の「パラグラフ・ライティング」ワークショップも、ライティング・ラボの周知に効果的なテーマであったことが伺える。

3. セッションについて

・後期も前期と同様に、①チューターが学校を訪問して実施する対面セッション、②Google社のアプリを活用したビデオ通話によるオンラインセッション、の2種類の方法でセッションを行った。

・本年度後期は木曜日と金曜日に開室し、1曜日につき1名から2名のチューターが担当した。基本は木曜日を田井チューターが、金曜日を黒田・田井チューターが担当する2名体制であった。どちらかのチューターが事情により担当できない場合、池内・中尾チューターが担当した。

・昨年度と同様、オンラインセッションは、中杉ミーティングルームで中杉教員のPCを使って接続するか、自宅から通信を行う形で実施の予定であったが、結果として大部分の学生が学校から接続した。また、生徒からは対面セッションの需要が高かった。

・また、後期のセッションを実施するなかで、事前の課題配信に添付しているファイルを生徒側で開くことができない、オンラインセッションの際にチューター側と生徒側で別のルームに入室してしまう、という事例が生じた。おそらく使用しているアプリ自体の不具合が原因と思われるが、今後セッションを実施していくなかで注意していく必要がある。

4. 所感

・本年度の生徒について

前期同様、本年度の生徒の特徴としてガジェット類への慣れをあげることができる。大部分の生徒がタブレット端末を使用してセッションを受けていた。

一方で、前期と比較して締め切り直前になるほど、卒業論文に苦慮している生徒が増える傾向が見て取れた。自らが立てた「問い」に答えることが難しい状態や論点があちらこちらに飛んでしまう状態の論文も少なからず散見された。高校の先輩から聞いてラボを利用した生徒も多く見受けられた。校内での更なる周知をはかり、早めのラボ利用を呼びかけていきたい。

・本年度の変更点について

Google 社のアプリを活用した双方向編集については、本年度は、セッション中にチューターと学生間で共同編集できるように調整した。そこで、相互にコミュニケーションをとりつつ文章の相互編集が可能となり、結果としてより効率的かつ効果的なセッションを実施できた。

・今季の反省点について

前期に、新任のチューターに対して初回セッション前の情報共有を行う必要が生じた。そのため、後期にセッションの流れや、中杉独自の「探求マップ」の使用など、セッション全体の進行に関するマニュアル作成を行った。今後の新任のチューターには、作成したマニュアルを使用して、開室に支障がでないよう業務フローを伝えていきたい。

以 上